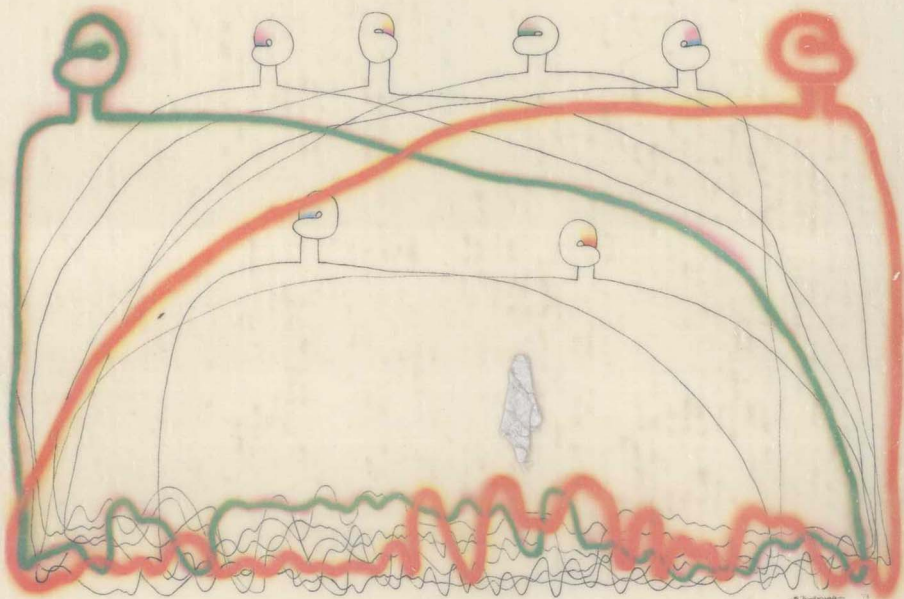


うぶ ごえ

一万人の産声を聴いた 島 一春



新潮社版

一万人の産^{うぶ}声^{こえ}を聴いた
島 一春

いちまんにん うねえ
一万人の産声を聴いた

昭和六十一年七月十五日印刷

昭和六十一年七月二十日発行

著者——島 一春 しかはる

©1986 by KAZUHARU SHIMA Printed in Japan

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 ○三—二六六—五二二（業務）
○三—二六六—五四二（編集）

郵便番号 一六二 振替 東京四一八〇八番



印刷所——三晃印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

落丁・乱丁本は、御面倒ですが小社通信係宛に御送付下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

定価——一二〇〇円

目次

一万人の産声を聞いた

第一章	産婆志願……………	7
-----	-----------	---

第二章	波瀾の河……………	50
-----	-----------	----

第三章	産声讃歌……………	93
-----	-----------	----

第四章	終りなき旅……………	193
-----	------------	-----

終章	星に祈る……………	243
----	-----------	-----

裝圖
元永定正

一万人の産声うぶごえを聴いた

第二章 産婆志願

(一)

加藤志んは、明治二十七年十二月三十日、神奈川^{ゆゑ}県^{こく}澁^き郡^{こく}国府村^{いんくさむら}生沢^{いんくさむら}（現・大磯町生沢）に生れた。

東海道の宿場駅だった大磯町に隣接し、明治二十九年に澁^{ゆゑ}郡^{こく}から中郡に替った国府村の北端には、標高二百十九メートルの鷹取山がそびえている。その鷹取山の南麓の、役場のある生沢、相模湾に面した国府新宿など、国府村には七つの集落があり、米、麦、養蚕、葉タバコの栽培をする複合経営の農家が多かった。

国府村生沢にある志んの家は、代々の屋号を磯右衛門といい、四反歩の水田、五反歩の桑園、それに三反歩の普通畑を耕作する自作農であった。

長女の志んは、乳を離れるとすぐに祖母のリエの手で育てられた。国府代官所の下級役人の娘だったリエは、幕末の武家の氣風を身につけていて、行儀作法には厳格であった。母のミツルも躰^{しつけ}には厳しい母親だが、祖母のリエほどではなかった。

父の長三郎は、志んや三人の弟たちに寛大であり、やさしかった。声を荒らげて叱ることはめ

ったになく、昔むかし嘶なになぞらえて物の道理を静かに、子らに教え諭すタイプの父親であった。まわりには厳父慈母の家庭が多かったが、志んの家はその逆だったわけだ。長三郎は、明治初年に生沢に開校した思文館で、論語、孟子、日本外史、書道などを学び、とくに論語と書道が得意だった。思文館の逸材と噂され、村でも評判の秀才だった、という。その話を祖母からたびたび聞かされていた志んは、父親をひそかに誇りに思うようになっていた。

こうした父の血を inheritance 継いだ志んは、利発で、記憶力も際立っていた。小学校での成績は常にクラス一番だったが、意志の強さと、そのひたむきで激しい性情は、どちらかといえば祖母と母親に似ていたようである。事実、志んの家のことで、物事が決ってゆくのは祖母と母親との間の話しあいであり、長三郎は常に話しあいの圏外にいて、無言でおだやかに女たちのする事を見守っている、といった風であった。

この時代、尋常小学校三、四年になると、国府村の女の子は繭の糸とりを習い、小学校を卒業するころから、機織はた織の練習をはじめると、各集落ごとに機織を教授する機屋があつて、農閑期に、少女たちはその機屋に通うのである。小学校を卒業すると、家事見習いをかねて、東京や横浜に女中奉公にいく者もいた。現に同じ生沢部落の、志んの幼な友達、若木律は小学校を卒業すると、横浜の履物問屋へ奉公に出ていった。風呂敷を手し、父親につれられて村を去っていった律の後ろ姿が志んの脳裡にこびりついてはなれないのである。だが村の娘の多くは、農作業になじみ、家事に馴れ、糸とり機を織り、そして十七、八歳になれば嫁にいったのである。母親のミツルも十五歳で長三郎と結婚し、十六の師走には志んを産んでいる。糸とり、機織に習熟していたし、田畑の仕事でも長三郎に劣ることはなかった。

しかし志んは、糸とりと機織を習うこともなく、高等科に進んだ。利発な志んを、村のふつう

の娘のようにではなく育てたいという長三郎の願いがそうさせたのだろうか、七十戸の生沢部落で、高等科に進学した女の子は、志んを含めて三人しかいなかったのである。

それは志んが高等科一年、明治四十一年の晩夏のことであった。同じクラスの岩崎テルが家の都合で中途退学をしていった。テルの母親がお産に失敗し、亡くなったためだ、という。テルは珠算がずば抜けて良くできる子であった。算術、国語、修身、地理、珠算、体育の六科目のなかで、志んがいくら努力しても、珠算と体育だけはテルに及ばなかった。いつもは無口で、めったに笑顔を見せることなく、一人ぼつんと教室の片隅に坐っているような子だったから、志んも格別に親しくしていたわけではない。だが、母親が死んでテルが退学したとき、大切にしていた櫛の歯が欠け落ちたような、空虚な寂しさにおそわれたことを、志んは憶えている。

それから数日経って、志んの隣部落の植村タツという三十過ぎの農婦がお産で死んだことを、母のミツルから聞いた。

「タツさんは、ひきつけを起こして、歯をぎりぎり噛んで、ものも言えないようになって、狂い死にしたってよ。五人も子供残して、気の毒なことだねえ」

子供を産み落すことのできない苦しみで、全身を烈しく痙攣させながら息をひきとった、という。志んには、その悲惨な死にざまがありありと想像された。

植村タツは五人の子を産んでいるが、五回の出産はきわめて軽く、「わたしのは犬のお産だから」とつねづね冗談めかして言っていたらしい。そのタツが、六回めのお産で、胎児もろとも三十五歳の生涯を終ったのだった。彼女の家は志んが学校に通う道脇の畑の中にあつて、朝、家の前を通りかかると、タツは赤ん坊を背負って洗濯物を干していたりした。顔は陽焼けしていて、

腰のがっちりした農婦であった。

産婦の死は、それから更にかさなる。

志んの家裏手には、田代川という名の小川が流れていた。川幅は五、六メートル、水量の乏しい川で、雨の日や梅雨どきのほかには川底の小石が顔をだすほどだ。その川の土橋を渡ってすぐ北側に、小早川という農家があった。昔ながらの古風な藁葺きの家で、夏になると大きな花を咲かせる向日葵が植えられている前庭に、いつも小太郎という臆病な黒毛の雄犬が繋がれていた。志んは犬が好きな、一番下の弟の武七を連れて、よく遊びに行つたものであった。

その小早川家の跡取り息子で、志んより十歳ほど年上の義吉に、サナエという嫁がいた。平塚近郊の農家から嫁いできたサナエは、年齢は義吉より五つ下の十九で、色が白く、ふっくらとしたおも長の顔はいつも紅をさしたよう、見るからに健康そうであった。

「わたしのことを志んさんに似ている、とうちの人が言うの。昔、志んさんと河原で蜻蛉つりしたことがあつたんだってね。わたし、志んさんみたいに頭はよくないけど、顔はほんとに似てみたいだな」

そう言って笑つたサナエの口もとから、白い綺麗な八重歯が覗いた。似ているのは、おも長の顔立ちと、ばっちりしているが笑えば糸のように細くなる目もとぐらいだろう、と思う。だが、匂いたつばかりの初々しい若嫁に似ていると言われると、志んはわけもなく胸がさわぐのをおぼえたものだった。夫と妻という志んにはうかがいしれぬ、秘めごとめいたところで交わされる会話のなかで、自分の容姿が話題になっている。そのことを思つて、志んは顔を赧らめるのであった。その年の田植えがすんだころから、サナエが身籠っていることに志んは気づいていた。しいに目立ってくる腹を盗み見て、どんな赤ちゃんが生れてくるのだろうか、と志んはひそかに愉

しみにしていたのである。

そのサナエが秋の農繁期のさなかにお産で死んだ。

「義吉さんが、サナエさんの遺体にとりすがって、男泣きに泣いてねえ。女がお産で死ぬのは憐れだけど、残された者もやりきれないよね」

お悔やみから帰ってきたリエが、戸口に立って、志んに清めの塩を体にかけてもらいながら呟いている。

陣痛の波におしだされるようにして、胎児が陰門から手をだしてしまったために、生れ出ることができない。夫の義吉が大磯町の外科医をよびに走り、医者は馬に乗って駆けつけたがすでに遅く、敷蒲団の上に敷いた淡紅色の腰巻を血で真っ赤に染めて、母子ともに絶命したという。

へあの笑顔のきれいなサナエさんが、お産で死んでしまった！

凄絶な死の光景が絵のように泛び、ずんと総毛だつ衝撃が志んをつらぬいた。お産には女の命がかかっている。恐怖と重苦しい戦慄にゆさぶられて、志んはしばらく身動きもできなかった。

翌日は葬式だった。陽が傾いてから棺が担ぎだされ、長い葬列はひなびた錆色の陽射しをあびて、秋風の吹く白い道をゆっくり進んでいく。葬列のなかには、ミツルも近所の女房たちもいたが、みな深くうなだれて、顔をあげている者は一人もいなかった。志んは川岸の草の上に立って、じっと葬列を見送っていた。

死んだ赤ちゃんは男だったのか、それとも女だったのだろうか、棺は一つだけど、あの中に赤ちゃんがお母さんに抱かれるようにして、納められているのだろうか、と志んは考える。女は結婚すれば誰でも子を産む。母もわたしたち四人の兄弟を産んだし、伯母にも六人の子がいる。だが、サナエさんは一人の子も産むことができず、苦しみながら十九の若さで死んでいった。サナ

エさんと赤ちゃんを助けることが、どうしてできなかったのだろうか。女が安心して赤ちゃんを産める手だてはないのだろうか。志んは葬列が鷹取山の麓を東に曲って見えなくなるまで、川岸に一人佇み、物思いに耽っていた。

当時の農漁村には、正式な免許をもった産婆はほとんどいないと言ってもよかった。お産の介助をする老女がどの村にも何人かいて、とりあげ婆さんと呼ばれていたが、彼女たちは自らの体験と永い伝承に従って赤子をとりあげる。そのとりあげ婆さんに介助を頼む産婦もいたが、多くは姑や血縁の女たちがお産に立ち合い、産婦に助言し、産婦を激励して出産させていたのである。正常なお産なら、それですんだ。だが、産婦や胎児に異常があり、分娩中の産婦に異変が起こったときは、なす術もなく、見殺しにするほかはなかった。産婦が死ねば、「運がなかった」「こうなる宿業を背負っていた」として片づけられていたのだった。

明治三十年代には、記録に残っているものだけで、一万人の赤子の出生に対して、三十人から四十人の産婦が死亡している。これは全国平均の数字であるが、国府村では戸数七十ばかりの二つの部落で、たった一年の間に三人の産婦が尊い命を失ったのである。

(二)

翌四十二年、志んは高等科二年になった。この年は麦が豊作だった。

加藤家の田と畑は六か所に分散しているが、鷹取山の登りくちにある段々畑の麦がいつも一番早く熟れる。山肌の斜面で陽当りがよいからだろう。ミツルはまた五人目の子を身籠っていたが、その日も長三郎と一緒に山に登っていく。大きな腹をかかえて畑仕事に出かける母親の力になろうと、志んも麦刈りを手伝うことにした。

「志ん、無理するんじゃないやねえよ。鎌で指を切ったりしねえように気をつけろ」

ミツルはしきりに娘のことを気遣っている。夫の長三郎が、志んを並みの娘とは違うと考えているふしがあるように、ミツルにも、志んを特別の存在とみる思いこみがあるようだった。どうしてそうなるのかと、他人が聞いてみたところで、答えようのないことだったろうが――。

真夏のような六月上旬の陽光が照りつける麦畑には、むっとする草いきれがよどんで、陽炎が燃えている。畑に立って南をはるかに見渡すと、二宮から大磯あたりにかけての杜と家並み越しに相模の海が白く光っていた。中腰になって一時間も麦を刈ると腰が痛くなり、季節はずれの暑気で、作業衣はぐっしり汗に濡れる。時間のたつのが永く感じられて、志んは幾たびも腰を伸ばして首筋の汗を拭いた。

「志ん、疲れたろう。もう昼あがりになりよう。おまえは麦はいいから、そのまま帰れ」

ミツルが言った。父の長三郎もそうしろ、というように刈った麦を束ねる手を休めてうなずいている。

昼あがりには刈った麦を背負って帰らねばならないのだが、ミツルは畑仕事に馴れない志んをかばって、そう言ったのだった。疲れきっていた志んは、手ぶらで段々畑の坂道をゆっくりとくだった。小川の土橋のたもとまできて振り返ると、麦を背負っておりてくるミツルの姿が見えた。長三郎は、斜面の陰に隠れていて、志んからは見えなかった。だが、しばらくして家に帰ってきたときのミツルは麦の束を背負ってはならず、戸口の近くで下腹部を手でおさえ、うずくまるようにしている。長三郎は麦の束を背負い、ミツルが途中までかついで来たものらしい麦束を前にかかえて、呆然と妻のかたわらに立っていた。「母さん!」というほとんど悲鳴に近い志んの叫び声を聞いて、リエが台所から駆けだしてきた。

「どうした、蒼い顔して」

「坂道で麦をしまったまま転んじゃった。腹と尻を打ったものだから、腹のや、やに障りができたみたいだ」

「それはいけないね。はやく横になって休まなければだめだ」

リエにかかえられるようにして、ミツルは奥の小部屋に入ったが、やがて低いおし殺すような呻き声を洩らしはじめた。妊娠九か月だったミツルは、麦を背負ったまま坂道で転倒し、したたかに腹部を打ち、その衝撃で陣痛がはじまったのである。リエがお産の準備をして、ミツルのわきに付添った。その夜にミツルの実母のカネが、そしてあくる日の午後には実兄の吉沢源造も黒岩の部落からかけつけて、ミツルをばがましている。しかしその日の夕方になっても、赤子は生れないのである。陣痛をこらえるミツルの呼吸は切迫してあえぐようになり、居間にいても、はらわたから絞り出すような呻き声の家じゅうにひびきわたる。

「ねえ、カネさん」

産室から出てきたリエが小声で、坐りもせず居間の隅に立ったまま心配そうにしている実母のカネに言った。

「前の四人の子を産んだときは様子が違うねえ。下り物が涸れたみたいだけど、これで身二つになれるかねえ」

「わたしもそれを心配しているのさ。ひどく弱って、体の力が失せていくようだしね」

二人の祖母の話聞いていて、志んは不吉な予感におそわれた。産室にはいつてみると、部屋の壁際に蒲団を折りたたんで積みかさね、それによりかかるようにして、ミツルが坐っている。眼窩が窪み、目のふちが黒ずんでいた。そいだように頬の肉が落ちて、唇は白く乾き、わずか一